「私たちが死刑評決しました。」

フランク・スワートローほか著、上田勢子訳

「裁く」ことの意味 切実に問う

人は人を裁くことができるのか。まして裁判官でない素人が。本書は米国であった有名なスコット・ピーターソン事件（夫による妻・胎児殺し。有罪を証明する証拠は何一つなく、状況証拠のみで死刑が確定した）裁判の経過を12人の陪審員や関係者の証言をもとに忠実に迫ったノンフィクションだ。

陪審員選びから評決までの約半年を16章で細かく分け、制度内容も一目でわかるように詳述されている。先ごろ、裁判員制度が始まり、その実態に不安を持つ者にとっては格好の参考書とも言えるだろう。

大衆の注目する事件ともなればそこにはマスコミや有名弁護士が登場し、あたかも法廷は「劇場」のように展開していく。特に、どちらかと言えば被告寄りだった3人の陪審員が途中解任され、急速に有罪へ傾いていく過程や、常に陪審員の行動（メモの有無、居眠り、閉廷後の雑談内容など）をチェックする内部密告者の存在は不気味です・らある。

また、陪審員のほとんどが、事件の詳細を写真や音声、フィルムなどで繰り返し確認するためPTSD（心的外傷後ストレス障害）に悩まされる実態も浮き彫りにされる。しかも、過酷な「守秘義務」のため悩みを誰にも相談できず、十分な公的アフターケアの制度も整っていないのが現状だ。

殺人事件の陪審員になることと戦争で兵士として戦うことは、どちらも人間の生死を決める点で共通し、自身の人間性を抑圧しかねないという、ある陪審コンサルタントの言葉は重い。

そんな中、評決が誰にどう影響するかは一切考えず、ただ被告の罪のみを冷静に見つめることを言い聞かせ、涙しながら量刑の判決を下す陪審員たちの姿は「死刑」の是非も含め、「裁く」ことの意味を切実に問うてくる。

かつて免田栄氏から、日本の裁判は「情」で動きやすいと聞いたことがある。法廷の劇場化が今後どのような影響をもたらすのか。周囲の「感情」や「雰囲気」に左右されぬ客観性の保持も含め、「自分ならどうするか」絶えず自問せずにはいられない貴重な一冊だ。

評・宮本誠一（NPO法人夢屋プラネット代表）

ランダムハウス講談社・1890円

◇Frank・Swertlow　米国の多くの雑誌で活躍するジャーナリスト。